

## 「流離の灯」 加藤栄三

1971年（昭和46年）第3回改組日展

227.3cm × 162.1cm 紙本彩色 額装 山種美術館所蔵

日展出品作としては絶筆となった作品。

ふるさと岐阜をこよなく愛した栄三が、日展最後の出品作に、長良川の花火と鵜飼を描いたことに何か因縁めいたものを感じます。

天空に炸裂する花火、川面に続く灯籠流しの行列と鵜飼舟。スケールの大きさを感じさせる名作です。

（特別展「加藤栄三・東一 響きあう兄弟愛と日本画の世界」に展示。期間は9月8日～10月9日まで）

**特別展** 岐阜市歴史博物館 同時開催  
加藤栄三・東一記念美術館

栄三生誕100年・東一生誕90年  
加藤栄三・東一 響きあう兄弟愛と  
日本画の世界

2006. 9. 8(金)~ 10. 22(日)

今年、岐阜市美殿町出身で日展を主な制作発表の場として活躍した日本画家：加藤栄三が生誕100年、弟の東一が生誕90年という記念すべき年です。また、平成3年5月にオープンした加藤栄三・東一記念美術館も開館15周年を迎えました。

この節目の年にあたり、栄三・東一の画業を顕彰する特別展を、岐阜市歴史博物館と加藤栄三・東一記念美術館の2会場で開催いたします。

本展では、いままであまり公開されなかった作品を多く展示し栄三・東一の新しい魅力を発見していただくよう心がけました。

昭和25年、第3回創造美術展に出品した栄三作「水浴」は、以後一度も展覧会に出品されたことがありませんでしたが、今回、ご遺族のご協力で56年ぶりに公開することができました。戦後、日本画滅亡論が叫ばれるなかで、新しい日本画を求めて創立された「創造美術」に、上村松篁・山本丘人らとともに参加した栄三の意欲が伝わってくる作品です。裸婦を描いた栄三作品としては唯一のものです。ぜひ、この機会にご鑑賞ください。

栄三の戦前の代表作は昭和20年7月の岐阜大空襲でほとんど焼失してしまいましたが、そのもととなったスケッチ類は一部現存しています。そのスケッチを多く展示し、焼失した戦前の作品を偲んでいただきます。

栄三は、季刊誌「別冊小説新潮」の表紙絵を昭和33年~47年まで担当しましたが、その原画



栄三作「水浴」

を岐阜で初めて展示します。本画（完成作品）と違い、素描の達人として評価の高かった栄三ならではの画風を鑑賞できます。

東一作品では、東京美術学校（現東京芸大）在学中、夏休みの宿題として描いたという「青柿」「栗」などの細密画を展示します。東一芸術の出発点となった作品で、その緻密な描写力には驚かされます。一見の価値のある作品です。

月刊誌に描いた水墨のカット20数点も展示します。昆虫から花まで単純化されたカットは、兄栄三と同じく素描の達人といわれた東一ならではの作品で、観る人の心をなごませてくれます。



東一作「栗」

大作としては、日本芸術院賞を受賞した栄三作「空」、東一作「女人」を久しぶりに同時に展示します。一般的に「柔」の栄三、「剛」の東一といわれる画風の違いを見比べていただける絶好の機会といえます。

また、日展出品作としては絶筆となった栄三作「流離の灯」、東一作「祈り」も同時に展示します。

15年前の開館記念式典で、東一は「長良川で孵化した稚鮎は、一度は海に下るが、再び母なる川＝長良川に回帰してくる。兄栄三の心も、きっとこの記念館に帰っていると思います。」と涙ながらに話されました。栄三生誕100年・東一生誕90年を記念して開催する特別展。きっと栄三・東一兄弟画伯の心が、この展覧会場に帰ってきていることでしょう。そんな思いを込めて鑑賞していただければと思います。

**関連行事**

対談「加藤栄三・東一両先生との思い出を語る」  
出演：土屋禮一氏、平光明彦氏 9月10日(日)14:00~  
歴史博物館講堂（事前に電話でお申し込みください）  
展示説明会 9月18日、10月1日、10月8日 11:00~、14:00~  
歴史博物館特別展示室 加藤栄三・東一記念美術館長

## 特別展

# 道三から信長へ

2006. 11. 2(木)~ 12. 10(日)

美濃の戦国時代、岐阜城（当時は井口城・金華山城とよばれていた）を本格的に整備したのは斎藤道三でした。この時から金華山の西麓に広がる井口は政治的・経済的・文化的に重要な都市へと変貌し、現在の岐阜市へつながっていきます。

斎藤道三は土岐頼芸をかついでその兄頼武から守護の地位を奪い、最終的に頼芸を美濃から追放した戦国時代の下剋上を象徴する人物です。しかし、その生涯は多くのなぞに包まれています。

織田信長に関しては良好な伝記を残した太田牛一が、道三による美濃制圧を一代と誤って伝えました。それよりもやや遅れて成立した『江濃記』や『老人雑話』が道三の父について記述していますが、やがてその事は忘れられ、その後の軍記物が牛一の説を踏襲し、道三油売り説、義龍が守護頼芸のご落胤だったという説などが織り交ぜられ、司馬遼太郎氏の『国盗り物語』に集大成されたのです。

30年ほど前から注目されるようになった近江の戦国大名・六角承禎の条書に道三の父・長井新左衛門尉の来歴に関する記述があります。歴史学の世界で、道三の「国盗り」二代説は定着したようにも見えますが、道三に関する歴史叙述は道三の鷲山城隠居説などいまだに、軍記物の強い影響下にとり残されたままです。

本年は、道三が嫡男義龍と長良川北部の土居口で争い敗死してから450年にあたります。本展はできるだけ良質な史料で道三の事跡をふりかえろうと企画しました。



斎藤道三像（部分）岐阜県・常在寺蔵

本展でとりあげる時代は、道三の父・長井新左衛門尉が亡くなり、道三が長井規秀の名で歴史上に登場した天文2年（1533）にはじまり、道三の娘婿でもある織田信長が道三の孫・龍興を伊勢に追い、岐阜に入城した永禄10年（1567）までとしました。この35年間は道三や義龍によって統治された一時期を除いて、美濃地方がもっとも政治的に不安定だった時期でもあります。

道三にはじまる斎藤氏三代の美濃での業績をふりかえるとともに、美濃の戦国史を、六角氏や織田氏など周辺の動向とからめながら再検討したいと思います。



織田信長像（部分）滋賀県・浄厳院蔵



六角承禎条書写（部分）春日家蔵

## 関連行事

### 講演会

11月19日（日）午後2時～

三鬼清一郎氏（名古屋大学名誉教授）

### 展示説明会

11月5・12・26日（日） 12月10日（日）

午前11時～・午後2時～ 当館学芸員

まちなか博士サポート講座

12月3日（日） 午後2時～

『道三と信長』

土山公仁（当館学芸員）

加藤栄三・東一記念美術館

～花の命を描く～

## はな・花展

2006.10.27(金)～2007.2.12(月)

絵画の世界では、草花鳥虫を描く東洋画の総称として「花鳥画」という分野があります。花鳥は風月とともに自然の美の代表として親しまれていますが、本展では、特に「花」をモチーフに描いた栄三・東一の作品に焦点をあて展示します。

春夏秋冬とあざやかに変化する日本の四季は、日本人の心を動かし独特の感性と美意識を育んできましたが、栄三・東一がそれらを如何にとらえ作品として表現したかその心を探ります。

栄三は「花」について、次のように語っています。

「私は四季の花を見ながら、菊やダリアあるいは芙蓉だとか立派な花が日本にはありますが、なぜか私は、ふっと人にも知られないあの道端に咲く花が非常に好きなのです。芭蕉の句でしょうか“よく見れば なずな花咲く 垣根かな”人は誰も注意しないでしょうけれども、心を留めて見れば、足元に人にも知られないでひっそり咲いている花の中にも、本当に美しいものがある。私たち絵描きは、それを見落とすてはいけません。自分ではそんなふうには戒めてい



栄三作「草花」

ます」また、ある対談では次のようにも語っています。

「今日は散る花、明日はこの花をみることができないかも知れないけれど、そのときみる花、そのときみる草に限りない愛情をこめて、

あるいはみつめ、あるいは見送る。その明け暮れです。写生はあるがままのある時の私です。私は懸命に写生に打込むことによって、より新しい自分の道を切り開いて行こうと考えています」

名もない花に対する栄三の心、写生に対する栄三の真摯な心が読み取れます。

栄三作品として「草花」「桜」「シリアの壺」「椿」「水芭蕉」「秋陽」などを展示します。

東一は「花」について、ある対談で次のように語っています。

「一つの雑草を見たときに、新しい感動で見られるといいと思うね。キザになるかもわからないけど、一木一草の命みたいなもんがね、感



東一作「百合」

じとれればと思うな。私たちは雑草とよんでいるけれども、それは人間の側の身勝手なことで、草そのものをよく見ると、一本一本、みんなやっぱりすごく美しい。これはやっぱり神様でなくちゃつくれる。まさに造化だと思う。」

「一期一会」を大切にされた東一ならではの言葉です。

東一作品としては「百合」「水仙」「菖蒲」「牡丹」などを展示します。

日本画の世界では、花の呼称を様々に表現することがあります。

「薔薇(ばら)」を「長春花」といいます。これはコウシンバラの漢名ですが、常に春であること、四季を通じて花のあることといった思いを込めての呼称です。

「牡丹(ぼたん)」を、その美しさを讃えて「富貴花」「花王」とも呼びます。

このような花の呼称は、いかに日本人が花に対して強い思いをもっていたかの表れでもあると思います。一輪の花で心の窓が開かれてしまうことを「一華開発」といいます。心の窓を開いて「花」の名画をご鑑賞ください。

# 博物館ニュース

## 新しくなった総合展示案内完成

平成16年11月から博物館を閉じ常設展示室の全面改装を行いました。そして翌年3月26日に常設展示室は総合展示室と名前も新しく生まれ変わりました。

そこには、戦国時代を核として、展示資料を一新した岐阜の歴史が広がっています。博物館では、この展示室にふさわしい案内書を作成することとしました。

こうしてできた総合展示の案内書は、展示資料の紹介にとどまることなく、同書をひもとけばおおよその岐阜の歴史を知ることができるようになっています。72ページ、オールカラー。

岐阜市歴史博物館ミュージアムショップで販売しています。定価500円です。



## 特別展「体験・発見！弥生時代」の体験補助ボランティア研修

当館では、現在119名のボランティアが活動しています。総合展示や特別展での解説・体験補助を行っています。

6月24日(土)は特別展「体験・発見！弥生時代」の体験補助の研修を行いました。学芸員から弥生時代の石庖丁の特徴や使い方について説明を受けたあと、体験用に作成した石庖丁で植物の茎を刈り取る体験を行いました。この他にも、貫頭衣を着る体験、石皿の上で木の実をつぶす体験、石器を作る体験の補助などの仕方を熱心に学びました。

こうしたボランティア研修は、年間20回以上計画されていて、学んだことを観覧者に還元しています。



### 特集展示(2階総合展示室内)

2階総合展示室の一角に特集展示コーナーを設置し、1~2ヵ月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。8月から12月の日程は下記の通りです。

8月10日(木)~9月3日(日) 関ヶ原合戦図絵巻を読む

9月5日(火)~9月18日(月・祝) 新収資料紹介 洛中洛外図屏風

9月21日(木)~10月29日(日) 鶺鴒の伝統と美

11月2日(木)~12月10日(日) 各務支考 新収資料から

### 柳津歴史民俗資料室の展示

分室・柳津歴史民俗資料室では、次の日程で展示を行います。観覧は無料です。

8月1日(火)~9月24日(日) 戦時下の子どもたち

9月26日(火)~10月29日(日) 明治・大正の菊人形

10月31日(火)~12月24日(日) 2万年前のぎふのくらし

〒501-6121 岐阜市柳津町下佐波西1丁目15 (もえぎの里2階) TEL 058-270-1080

## 研究ノート

# 4枚の線路平面図(上)

～幻の中濃軽便鉄道～

大塚 清史

平成13年、茶道関係資料を核とした岐阜市長良大野家資料218点が当館へ寄贈された。大野家当主は久田流の高弟として、木訥庵の号で知られている。他方、明治8年(1875)生れの木訥庵2代目鋈二は、美濃電気軌道取締役をはじめ、長良軽便鉄道(長良～高富間・大正2年開業)、十六銀行、岐阜貯蓄銀行の各監査役などを務めた実業家でもあった。

さて、当コレクションのなかに青焼き線路平面図が含まれている。内訳は「其ノ一」「其ノ二」に分かれた「酒倉上加納間」2枚、「酒倉吉田間」1枚(図1)、そして「酒倉金山間 其ノ一」1枚の合計4枚で、「酒倉金山間 其ノ二」は失われている。図示する路線は、現在の岐阜市安良田町から各務原市鷓沼、加茂郡坂祝町酒倉、美濃加茂市太田、川辺町川辺を經由して下呂市金山に至るものと、酒倉から分岐して関市吉田の新長谷寺附近に至る2線で、それぞれ現在のJR高山本線と長良川鉄道(旧国鉄越美南線)の一部ルートとに近似するものである。しかしながら、作図年や作成者の記載が無く、その経緯は明らかでなかった。

近年、地方における鉄道の再評価が進みつつある。そこで、木訥庵コレクションの本図面(以下木訥庵本と記す)について、若干の検討を試みることにした。

まず、本図の作成年代を考える上で注目されるのは、岐阜側起点附近の設定である(図2)。安良田町の名古屋街道東側に上加納停車場を計画し、明治20年敷設の旧東海道線を横断して路線を設定している。旧東海道線には、岐阜駅拡張に伴い、43年に鉄道院の認可を受け大正2年(1913)に移設した現在線を点線で示しており、計画線は既にこの移設を前提としていたことがわかる。すなわち、本図は明治40年代～大正初年頃に作図したものといえよう。

この時期、当地域では明治44年(1911)に美濃電気軌道株式会社が駅前～今小町、神田町～上有知間を開業しているが、その他数多の鉄道敷設計画が知られている。美濃電気軌道についても、その前身は、27年岐阜～関～多治見、関

～上有知間を計画して組織した美濃鉄道である。30年に仮免許、36年本免許を受けたが翌年失効し、39年に関～多治見を除き、新たに市内線を加え、岐阜市神田町～湊町、神田町～関～上有知(現美濃市)間で免許を申請し、翌年認可された。「美濃電気軌道敷設転末」によれば、当初から別に岐阜電気軌道株式会社の名で岐阜～笠松間の敷設計画や、美濃町線完成とともに郡上市八幡町までの延伸構想をもっていた。当社の計画に対し、岐阜～高山間の鉄道計画をもつ濃越電気鉄道株式会社から、40年に競願する岐阜～上有知間について完成後譲渡の依頼があり受諾、契約したが、その後当該会社が解散し消滅したという。また、同年津島、犬山両線の特許を得た名古屋電気鉄道株式会社からも権利譲渡の申込みがあったが、こちらは協議が成立しなかったとされる。しかし、同社は大正元年犬山線を完成させると、早速関まで踏査をおこない、10年には犬山～関間の免許を受けた。

なお、岐阜～多治見間の鉄道敷設計画は、明治30年の鉄道敷設法で採択線となり、中仙道幹線(縦貫)鉄道の名で、43年より岐阜市をはじめ関係市町村により速成同盟会が結成され、中央への強力な請願運動を実施していた。

岐阜～高山間でも古くから鉄道敷設の動きがあり、明治25年(1892)高山の住民平を中心に飛騨鉄道敷設請願書を国に提出し、同年鉄道敷設法第2条で予定鉄道線路の一つに規定された。28年には飛騨鉄道株式会社(太田～金山～高山～富山)が計画され、同時期岐阜市の渡邊甚吉を中心に、上記計画を岐阜起点にした中北鉄道株式会社なる私設計画もあったようである。その後43年に飛騨三郡町村会にて飛騨鉄道速成委員会が設けられ、建設促進の陳情を重ねた結果、大正7年(1918)に建設線に編入されルートも決定した。

この一連の動きのなかで、岐阜日日新聞は名電犬山線が開通した大正元年(1912)8月19日付「名電関延長計画」記事にて、当計画が及ぼす美濃電への影響を懸念するとともに「仄に聞く処に依れば岐阜、鷓沼、太田を経て武儀郡金山町方面に至る中濃軽鉄の発起者中に於ても名電犬山線の開通を顧慮して事業着手を躊躇せんかの振合あり」と報じている。この「中濃軽鉄」が、路線からみて本図に関わっていると考えられよう。

「中濃軽鉄」については、国立公文書館に旧鉄

道院の許認可関係文書が残っている。それによれば、同社は中濃軽便鉄道株式会社として明治45年（1912）に岐阜～太田～金山間、太田～吉田間、総延長49マイル15チェーン（約79.16km）の免許を受けた。発起人総代は下麻生町（現加茂郡川辺町）の前島丈之助で、資本金150万円にて本社を下麻生町に置き、蒸気を動力とし、軌間は2フィート6インチ（762mm）を予定した。その目的は金山～岐阜間の交通の便をはかると同時に、飛騨の林産、農産物輸送を目論んだもので、当初の岐阜～金山間年間収入予測は、貨物161,100円に対して旅客129,960円であった。この目的は飛騨鉄道敷設の請願をした

住民平等の考えと軌を一にするものである。

前島丈之助は明治4年生れ。下麻生町で材木商を営むとともに、県議会議員、町長、加茂郡銀行頭取、大正2年開業の中濃電気会社取締役等を歴任した。その他の発起人には、加茂、武儀両郡有力者6名が名を連ねている。前島は岐阜～高山間や岐阜～多治見間の鉄道について、「政府財政ノ都合ニ依リ其起工ノ時機ヲ予想スル能ハサルヲ遺憾」とし、「有益ナル一部区間ヲ急設」を目指したのである。ただし、官設予定線のルートが確定した後には工事着手するつもりであることが、出願に際して付された県の副申に記載されている。（つづく）

表1 中濃軽便鉄道年譜

年月日	事項	記載された起点及び終点		
明治44年 10月6日	前島丈之助外6名、中濃軽便鉄道として軽便鉄道敷設免許を出願			
明治45年 3月25日	軽便鉄道を敷設し旅客及び貨物輸送を為す免許状を取得し、命令書を受ける。工事施行認可申請期限明治46年3月24日迄	岐阜市安良田町～金山町神戸	太田町字若宮裏～吉田村下横町	
大正2年 1月31日	工事施行認可申請期限延期を大正3年3月24日迄申請			
3月24日	工事施行認可申請期限延期を大正2年9月24日迄許可			
9月12日	武藤助右衛門外3名の発起人追加及び工事施行認可申請期限延期を大正3年3月24日迄申請			
9月22日	工事施行認可申請期限延期の陳情書提出	太田～鶴沼	太田～森山	坂祝～吉田
9月25日（立案）	工事施行認可申請期限延期を大正3年3月24日迄許可			
9月27日	武藤助右衛門外3名の発起人追加を許可			
12月20日	榎尾長右衛門外3名の発起人追加を申請			
大正3年 3月7日	起業目論見書変更を申請（社名を中濃電気鉄道株式会社と改称・蒸気動力を電気に変更・線路短縮・軌道幅員3フィート6インチ・延長哩程18マイル20チェーン・建設資金50万円）	太田町字天王浦～鶴沼村字馬場	太田町天王浦～川辺町上川辺字瀧沢	坂祝町黒岩字東前～吉田村中町北
3月18日	工事施行認可申請期限延期を大正3年5月24日迄申請			
3月20日	株主総会開会			
4月1日	榎尾長右衛門外3名の発起人追加及び工事施行認可申請期限延期を大正3年5月24日迄許可。起業目論見書変更を認可			
5月23日	免許状等を返納			

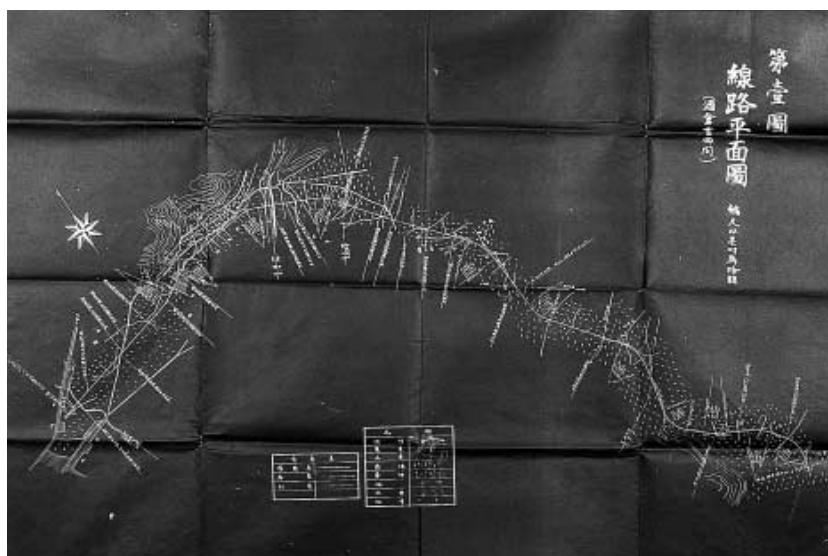


図1 線路平面図（酒倉～吉田間）

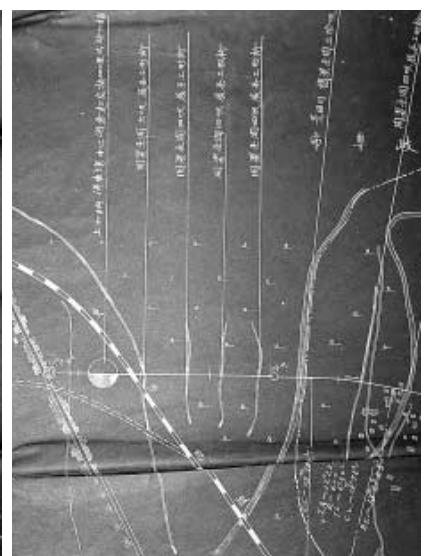


図2 上加納停車場付近

# \*\*\*\*\* 館蔵資料紹介 \*\*\*\*\*

## 「子規忌すまして…」画賛

塩谷鶴平賛、小森青雨画 大正10年（1921）

縦130.5cm、横64.5cm 津田裕子氏寄贈

「子規忌すましてことしの瘦せ 鶴平」。子規忌は俳句・和歌の革新者として知られる正岡子規の忌日です。賛をする塩谷鶴平（1877～1940）は岐阜県厚見郡江崎村（現在は岐阜市江崎）の大地主の家に生まれました。中学在学中から句作り、明治33年（1900）『ホトトギス』などに句が入選して俳人としての本格的なスタートを切りました。同35年に上京して病床の子規と初めて対面しましたが、その年に子規は亡くなります。その後は河東碧梧桐（1873～1937）に師事し、終生の交わりを結びました。碧梧桐は明治末期から俳句の新風を旨とし、のちには季題や形式にとらわれない自由律俳句が生まれます。それとともに鶴平も自由律俳壇の担い手となりました。郷里に根をおろして俳誌『鶴川』『俳藪』などを発行・指導し、岐阜日日新聞の俳壇も担当した鶴平のまわりには多くの俳人が育ちました。本作品に塩谷家を描いている大垣の画家・小森青雨（1888～1931）もその一人です。



毎年9月19日の子規忌には、塩谷家につどいた人たちが子規の遺墨に囲まれて句作をするとともに、鮎雑炊に舌鼓をうちました。大正10年の子規忌は少し日延べしておこなわれ、鶴平の個人誌『土』大正10年10月号巻頭にこの句が掲載されています。

長良橋南詰ポケットパークに碧梧桐句碑「闇中に山ぞ聳つ鶴川哉」(昭和13年に鶴平建立、同56年現地に移転)、御手洗池ほとりに鶴平句碑「正史にはさありとも鷹の涙落つ」(同35年建立)と、岐阜公園周辺では師弟の句碑をそろって見ることができます。

\*\*\*\*\*

## 利用の御案内

**開館時間** 午前9時～午後5時  
（入館は午後4時30分まで）  
**休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日（月曜日が休日の場合は翌日）  
特別展期間中は変更することがありますのでご注意ください。

**観覧料**  
歴史博物館常設展、加藤栄三・東一記念美術館  
高校生以上300円（団体240円）  
小・中学生150円（団体90円）  
両館共通で観覧される場合  
高校生以上500円（団体400円）  
小・中学生250円（団体150円）  
団体は20人以上、市内の小・中学生は無料  
**特別展** そのつど定めた金額

**交通案内** JR岐阜駅・名鉄岐阜駅より、岐阜バスで「長良方面行き」に乗り、「岐阜公園・歴史博物館前」で下車、すぐ東に歴史博物館があります。  
公園内ロープウェイ乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

博物館だより 63 2006.8  
編集・発行 岐阜市歴史博物館  
〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1 ☎058(265)0010  
（分館）加藤栄三・東一記念美術館  
〒500-8003 岐阜市大宮町1-46 ☎058(264)6410